

令和2(2020)年度 特別推進研究 審査結果の所見

研究課題名	アジアと欧米：コミュニケーションの文化差から言語の獲得過程を探る
研究代表者	馬塚 れい子（国立研究開発法人理化学研究所・脳神経科学研究センター・チームリーダー）
研究期間	令和2(2020)年度～令和6(2024)年度
<p>科学研究費委員会 審査・評価第一部会 における所見</p>	<p>【課題の概要】</p> <p>近年の研究では、英語を学ぶ乳幼児に比べ、日本語などのアジア諸語を学ぶ乳幼児の音韻発達や語彙発達が遅いことが指摘されている。この違いは、言語特性からは説明できず、欧米とアジアの母子コミュニケーションの文化差に起因している可能性がある。本研究は、欧米とアジアの乳幼児期の言語習得において時間差が生じる要因を母子コミュニケーションにおける共同注意に着目して、日本語やタイ語、北京語、韓国語、英語、フランス語を習得する乳幼児の音韻、語彙、語順の発達過程を6か国で比較実験することにより、「乳児の語彙発達が語彙発達に親和性の高い母子コミュニケーションによって促進され、それが音韻の発達にも影響する」ことを検証する。</p> <p>【学術的意義、期待される研究成果等】</p> <p>従来 of 言語習得の定説では音韻発達が語彙発達に影響するとされてきたのに対して、本研究は語彙発達が音韻発達に影響するという因果的影響力の機序を逆転させる可能性を秘めている点に独創性がある。また、乳幼児の言語習得はこれまで言語特性の問題として取り扱われる傾向にあったが、本研究では母子コミュニケーションの文化差や社会性との関連で説明するというこれまでにない視点を取り入れている。さらに、乳幼児の音韻発達や語彙発達についてはこれまでは主に英語習得を事例として研究されてきたが、本研究は日本語やタイ語、北京語、韓国語、英語、フランス語の習得過程に関する通文化的実験研究であり、英語中心で行われていたこの分野に変革をもたらすことが期待できる。</p>